



報仇

繪本高尾外傳

壹

奎壁堂

高尾外傳

全五冊

13
3018
1



13
3018
15
門へ13
3018
卷1

軍談小説
梶野戯作

高尾外傳序

昭和九年
七月十二日
購末

一日画工英尔子。他より酒田川に遊び
松と風雅の生心。為るる。ぬ英尔楚
滿人。ゆじと繪師乃洋齋谷の。最。初。初
音乃。嗜。う。ま。な。及。み。婦。女子の。歡。は。た。と。不。安
禁。海。人。之。音。を。守。り。実。を。活。為。水。が。海。海。作。の
浮。世。りの。世。の。法。を。お。ほ。の。程。ふ。面。た。た。未。未

高尾外傳

を養育ししと懶惰的風雅な如く酒を
もね。冷房は二人達をよほりけり
おろし人接障子。給家とむ店ありやあや
色氣な油と。食氣の香気といふをけり捨
ゝあはるのみを人出取と。葉の味を足がほる
の。上戸の口は無きとて。酒と茶の香気は
と。折れし善長の家をたゞす。英

沸人志いしく侍まふ。風解山人見事とんま
く。出家一個の善者。敵が味方。又作の
の。僧侶も。それな人。後述ぬ。千の
と。今日も。是の。後述は。又。遠
世。福。寺。法。由。の。侍。乳。の。山。も。越。て。彼
邊。ま。か。の。衣。膝。大。石。は。持。せ。ぬ。言。の。葉。の。若。き

探はん傳あり。彼も志とまき(まき)をいんちうと
古字の者の傳も異とまき(まき)の人のまき
風雅のけい焼又まき(まき)のまき(まき)のまき
肉のまき(まき)のまき(まき)のまき(まき)のまき
塚のまき(まき)のまき(まき)のまき(まき)のまき
まきのまき(まき)のまき(まき)のまき(まき)のまき
新傳のまき(まき)のまき(まき)のまき(まき)のまき

もまきのまき(まき)のまき(まき)のまき(まき)のまき
まきのまき(まき)のまき(まき)のまき(まき)のまき

天保十四
社割金庫のまき(まき)
楚滿人誌也
初月中也

十日
晋米齋門人
晋上齋屋平也

古畫乃

編圖

英泉門人

春川英笑筆



正人

仙女

とん
とん



顔形おのまゝのりた仙女唐

編り念はるゝおのりた

霜飛艶々萬楓間錯認春冷楚
外還音女鋪生無古蕪木公剪徒
未稍間風烟酒拂乞干鴉水架漁
半錦一灣不足深秋好顏色
誰
冷澹之看山
白善書



貞婦楓

下五葉

庄乃害と

はきくはひの

其角



無星

夜這野

鳴るおや郭公

晋子

浪人
向阪甚内



太郎

茂太郎

娘

於照

後

妻

向花



三浦屋内

高尾

洞房

語園

廊

雪弓

長柄杖をさく
さつは可菊



英泉画

大富

盛夏不消暑

後年冬々々

風 秋生子裏

花月入懐中

看らばにやせし秋乃

風がねがなむく思

ふさもわじとそあり



英笑筆



船頭
揖藏

戸田

覺

太

郎



焦尾琴

猿這

多丸

とらん

とや

乃

晋子
其角

番頭
八喜

秋^{あき}は 山^{やま}の
 外^と 山^{やま}の
 うす みねの
 ろみちら
 時^{とき}雨^{あめ}
 かしら
 そめと
 と海





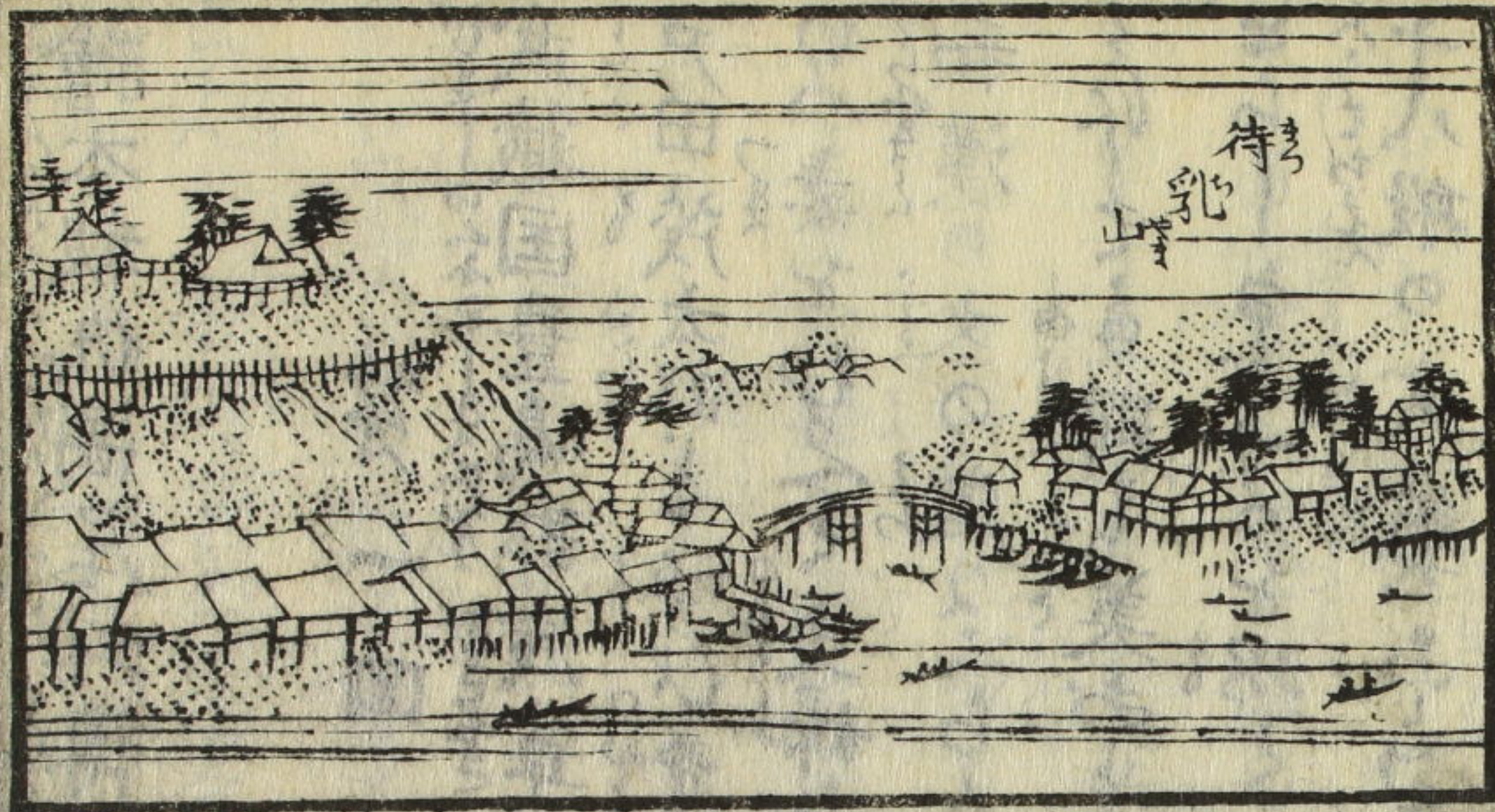
戸田茂次郎 向 甚 内 擊



おもゑろふ 屋がくく船しと 務舟くか

高尾之真跡

高尾之真跡
 一人を
 見し
 高尾の
 山に
 待たし
 ぬ
 人
 高尾の
 山に
 待たし
 ぬ
 高尾の
 山に
 待たし
 ぬ



江戸船の船頭梅藏
 待たぬ山に戸田
 茂膳
 高尾の山に待たしぬ

繪本報仇高尾外傳卷之一

江戸 楚満人著

第一回

武藏国豊嶋郡浅草の片辺りあきくさの兄弟あなの隠士いんしの兄あなが名を
 戸田茂太郎とだけと呼び弟を茂次郎もじと呼つた茂太郎は既なに楓かえと
 其の妻をむすむ夫婦ふうふあり睦むつく暮くしける其の姓せい文学ぶんがくを好このむ
 和漢わかんの文ぶんの道みちを知らず詩うた和哥わがを詠よむる業わざに
 とりて跡あとも美うおとかりけは巴里ぱりの總角そうかく号ごうに本ほんを
 知らざるを以もて活業かつぎとすね其の武術ぶじゆつに秀ひる
 十八般じゅうはちぱんの武藝ぶげいありて其温奥おんおくをききめずといふ事ことなる

此のころ近辺ちかに杜校とがうといふ所を以もて業わざとすね。徒た
 来きたる兄弟あなの或ある大國おほくにの諸侯しよこうははた久ひさしり身みなり
 がいさ子細こさいありて斯かくく浪なみの才さいといふなりは是こゝに貯録ちよろく
 もらすうらねば富とみる事ことありてあはらざる事ことありて最さい
 事ことを以もて世よを送おくるに原はら這こ戸田氏とだけの代よに冷倫れいりんの
 教しゆを以もて其道そのみちに感能かんのうありて笛ふえの妙手めいしゆと聞きける事ことありて
 茂次郎もじの門人かども志こころざりてふえ兄あなとす事ことありて居ゐ
 らんも奈何いかんとて葛飾くさしのやうに人居にて移うつる縁えんで
 ありけん某氏あつがの女め繁はな児こといふ事ことありて嫁よめとす事ことありて

く懐妊する當る十月に易く玉のおくた男子をくふけ
くどバ夫婦がよろこひ大くうらやま。お色と覚太郎とな
づけ。神頂のたもとをいつくしそをてける。爰又兄の茂
太郎夫婦はさせる活業もな。廿捨人もおるけきど。
春のた秋の経も只夫婦のろも連がらくとせとうがゆ
詩と賦和哥と詠と志と言ひ思ひと速を以て楽と
ね折しも北里なる萬字屋何がとり入る妓院のうえなる。
玉菊とよなる名妓世とされる一周の志とくくさささく。
世が追善にころろどりの夏とどりまらる。いごに
くくをけさせを燈ろりうけうひくのみ玉

菊が盃とるさも二ツおの客人のあしをぢめんとする
るおぞお珍らしきを好む人情この噂高く老若男女
北丹にほびく燈籠を見るののびびり茂太郎
夫婦もけしをけく閑くまらばその燈籠を見なめと
て一タゆらりも吾家と立りて花街をさし行
道すくら日本堤の這かこるる西方寺といふ蘭若の辺
りまて来りける茂太郎ハ刺屋へ行く行かぬ一個何
かある寺のうらたのりてそこよ爰よと見あつく中た大い
なる紅葉の木のかたさかちる石の面々地藏菩薩を
彫り轉々娘身信女文治二年某月某日とあり又九

了の一句の辞世を著きて寒風にゆらゆらも朽る紅葉の
 ひとあり扱ひ何心なくこの塚を見て思ひけり。信女と
 あれば定ゆり女ならんが何国にゆき入るや女は悲し羅深
 き身とまきくののさうろ辞世を口吟と死すること天晴
 しの更らうと漫る感涙を催し居る事不思議や暴風
 さめと吹おろし紅葉の木の葉をちりちりけり。楓が
 懐へ落葉多く入る事急ふとらひいごさんとするに
 更に一葉もなかり不審と知りゆらに何やらん腹の
 中にくく覚ゆらにぞ塚のむらに跡居る事とける。茂太郎
 ハ斯くもあらず方々楓が跡蹟とさかすかありて愛

来り最前より何所へゆたしやと方々をたねね。何れ何れ
 何更もきて居る事と問ふ不楓あまもあまりにあまきぬ
 の遅きゆゑ何あらまけ心寺へりりて見ます。いけ塚を
 見と不覚に世の中の無常と感ず涙とめらふせし折らぬ
 て風の吹きさうと紅葉をちりちり落葉の懐へいりゆゑ
 をらひいごさんとせしに落葉は多く却る腹の痛く覚ゆら
 によろく時氣を休め居る事。抑け塚はるに人の塚あ
 りぬとゆら。茂太郎きぬけ塚は信州三浦屋の名妓
 とよびま。二代目の高尾が塚中にてけりいまあいち。渠が
 口吟たる事。畧人口は贈灸すまば我も聞る。あしあり。

道哲庵の古又
葉塚の古又
をきく



谷川のからげとあすい
高尾詠
かろわん嵐かあま
家の紅葉

此内伝出位七

きり今日の夢をもうどまのらせんと思ひ合せつらうゆり
あふべや否やといふは扱ひ夢の心地あく吾侪これ
子をりしと思ひつゞど其宿望とをこす。さうとぞては身
ハ可國のりあうゆ方あくこが子とならんといふ宜しき且その
名をわくしあけりといふは。彼女あそく妻ハ昼間君の回
向あつらうし紅葉の塚のわろどきりといふくと思へば南
柯の夢ハ覺つ楓ハ全身に汗を流しまふ向ひ夢裡のあり
さぬと物語るに茂太郎ハあ笑ひをを夢よさぬぐの品あり
て園禮の春官に六夢の吉凶を説て思ふあそくを爰見ら。是を
思夢といふと裁く。你日昼高尾ヶ塚に詣心中にその

夢をかりひ居るといふとそ去る夢を見らるり怪しむと早
ハ番お捨て置ねくといひひくひすもくけげうけるが楓様
脏して女子とめわけく。不思議なるを限りあけまど日
頃の望くろくとよらとびお照と名づけ只掌中の玉のお
くくいらくひことあうてかきず成長せむ才茂次郎が
昨覚太郎はとや。ながく両家おまきくせんといふ
あせし後ハ猶更よ其ひく。さうを指折くどく待程は覺
太郎三歳の春弥生の半三社推現の祭りのおらら父母
あらしも後草寺へゆき。奈何なけん群集のさうあく
覚太郎と見失ひけま。夫婦ハ狂氣のおとくはかりて。

遠逝と云ふなりとむきども更にもさうけいば力なく其
 終立りの兄茂太郎と其よしと告るに茂太郎もさう駭くも
 ありと云ふなり四方にまよひとかりと探しけしきも竟も
 ざりけしき詮術なく其日と命日とて追善供養をい
 きむより外ありきむふ茂太郎も妻楓の不圖風の
 とあむせしが日とあむのちとがひ病專針灸茶餅の
 るもさう黄泉の人とさういふ茂太郎ハいもさうさう
 茂次郎夫婦も嫂の死力をむく悲歎の泪もむせび
 がかくてをさしもあむるまは北邦二序の烟とさうい
 ありと娘の照りも二女のまはるまは娘の養育といひ

老朽し身にもあらねば萬ふはまて妻なくして使
 んと人のすむらにまをさくお花といひ後妻とめと
 けむ死もさうめのかさといひ信やうもまお仕へ娘の照
 もりくさしは次郎に衣袋に綺羅とさう萬も奢り
 の心も死くまとも茂もなれお照も悪く折ふふとて
 ハ痛くささしなごまけとぞ茂太郎ハお情もさう
 あまをさうば茂次郎夫婦ありく兄が許と訪ふあり
 らあまを見く茂太郎不告離別をすめける程に茂太郎
 ハ却く大ひお怒りお照継母とあまごりてさういひ
 妻の怒りも理なりあるを離別せよと縁故あり向後

たやうの妻とつゞき吾方へ来るべしと云ふに以の外腰立ける
あぞ茂次郎の兄が情慾に迷ひてお花がわづらひを
しつねをあやぶむと云ふも其妻の用ひらざるを
其後ハ疎々しくつのお胡越の思ひをぬ

算二二回

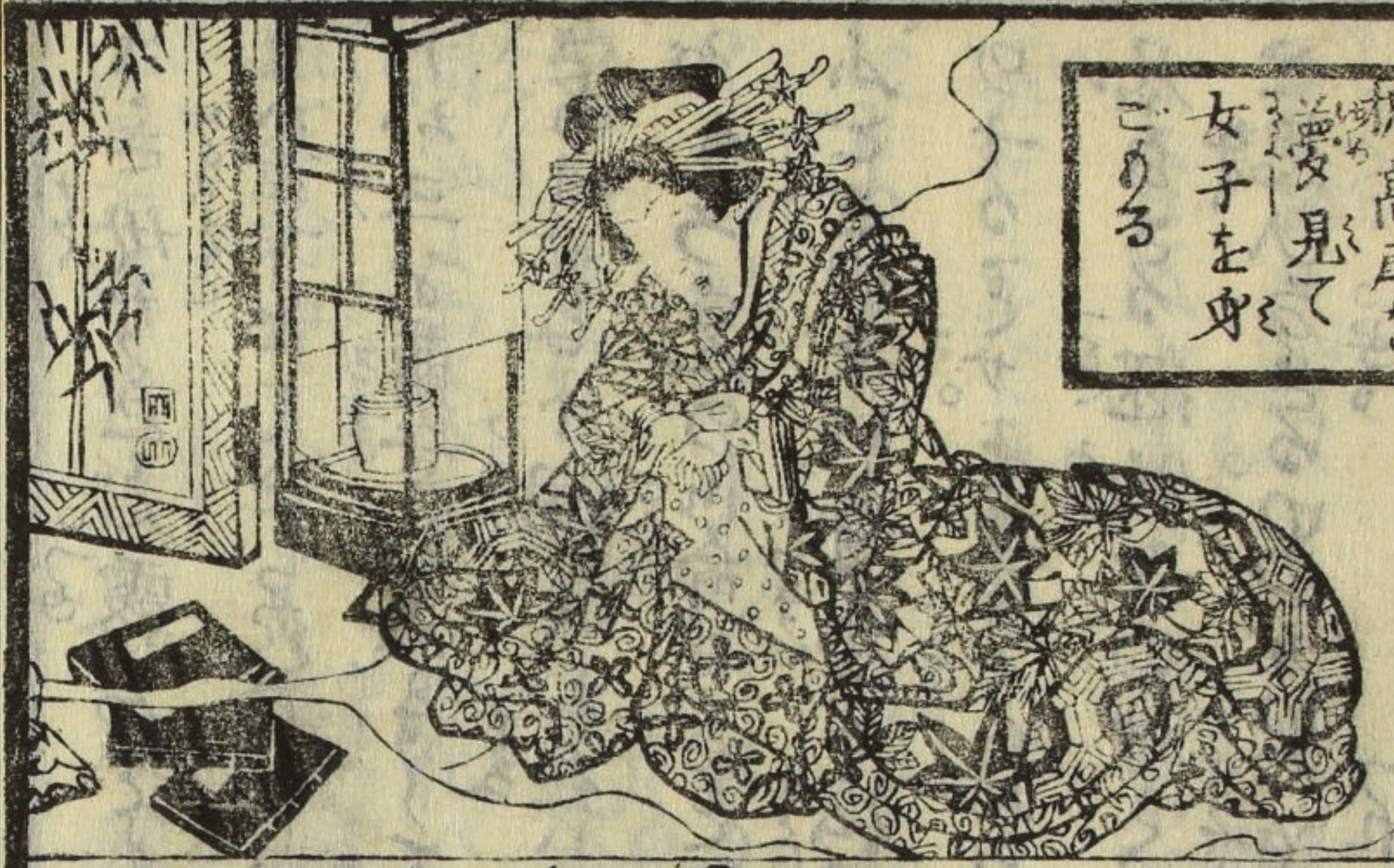
宿も戸田茂次郎ハ蝶花とらうと云ふ一獨子に生別是兄
茂太郎ハ後妻の色香にまぎひて信ある諫をりちひが鬼
や角やしくむと云ふくせ申妻のをきげ急病くと云ふも
まゝかろくく車々の憂喜ハ愁ひ浮世ハまらんも
いゝと云く多くの門をくあつと云ふといひ家財をうかぬ

六十六部の廻國おぢく行系もあまのりける去る程
茂太郎ハその性柔弱の身是やと常に病ぐらに暮れ
けしが管根の温泉お浴さびやくと相州へと廻りて病
世つや終振の山中やく何者ともあらず闇おにたり
残るやく奪ひ去らるる懐中の書物ありてふりて武
浅草なる人といふ妻あまで彼方より告ぐけはか花ハ
どらたはさるるやくと云ふと大うからずは時お照ハ既ハ十四
おひひけしが父が横死のよを聞く狂氣のどく悲歎の泪
まむせくれ詮方なく早速入をつらとて死らと引取り
辺送りくるおとく營々てその佛妻をこらうつと云ふ

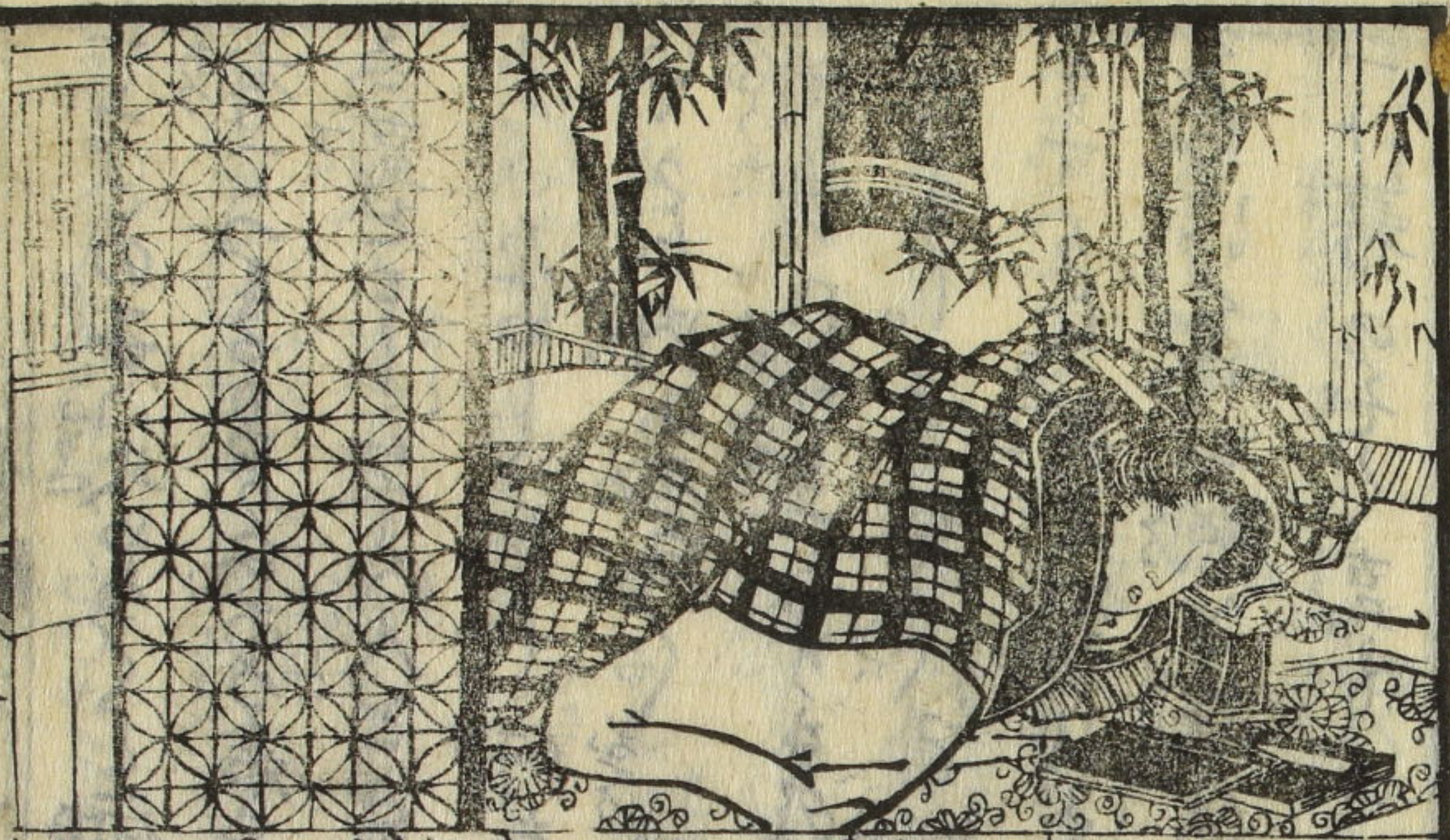
来茂太郎の官府につづる身にもあらず逸民の責ふして珠
 吏の時のありけり。けしきば、おれはのまゝ三十の上を多
 りこねど、寡にとも熊ふ暗とて戸田氏をつぐせむとて後
 家とて暮らけり。其後の表方か照をりくく
 ひまのを見すまご内むあつひつて、夢何卒深うひ
 く萬のぐまあつ、あるまひたりのまゝ。その悪年とぞ
 めららけり。○借も先増の閑守りく。たやくも茂太郎が
 周忌のあつたれ、おれはたやく起り。髪と結湯ふ入る化
 粧とて寺あつとも、梅山半分はく下女を呵のちじり。余
 必目とほむ、供のうち珠数つまらざるぞ、あつけしお照の鑑

たさ母がきど、露もどもあどを廉畧ふせど。下女のろくも
 二金下とてくらたながら、「あつさんへ今日のお寺とあつた
 いか三を曹守にあらまして、とてくを連れおいでなつと下
 さりませむト、聞くとおれは目に角とて、「又たどきつた。何
 ぢとらえんの由命日とていつくおの娘が寺まのうらなでもよ
 ぶごのまび寺あつた、おれはのいご、ごまのよめる婿嫁
 のするてサ。そまよりのいおれ、内は居てこのぢうくらうの
 居るさる、継物をあげくあさのませ、あつてもモウ、幾年も
 と思ひるさる。つらがり、道人は衣服を縫くのらつて着ても
 すむ、供あいか三を連れ行くせ、ごも、往くもねけ

風高尾を
夢見て
女子を身
こゆる



まどあうごがうの何の死であらうと石
あまのき居るをうへりごとく何
ふるもの。元の入仏受とやらで。お
寺へ金とあけらるる費なものへら
馬鹿く〜の。マヤ〜母さんめうと
いの夏とあつあつま〜。お寺へ金を
あげると和尚とるが。お経とよんで
いふまはらうら功德とやらで。父さん
極楽へあつあつらるるで。おのまはらう。そ
まどあうとら。盆の時お寺の掛地で



とまあご地獄へ落て業のまらうと
らにりけらまらう。又鬼に古とらるる
う針の山へ登せらまらう。もう〜思
ひ知〜もあつあつひがまら。殊更又
物と死んであつあつ。終羅道とやら
あちま〜と不切〜。あちま〜
かり〜と〜と聞き〜。定め〜
父さんその終羅道とやらへ落
てあつあつらるるで。おん〜
とら〜。とら〜と涙ぐまら。

一そこの子ハ又やうくと何の地獄どの極楽どのとりのり
 有つまるりやあつあつとん坊主やが袂取病ふりうく
 る夏とこしらへく人とごますのど死んでゆく先りら便りの
 あつたやいひみー何をさるものるか寺まのりせせばとも
 いくら内お居なく ちよびごいのませうけきど今日ハ
 周忌の凶命ヨでさうまのくらちよび連くおでるすのりくご
 さりまー。まよその代を明日くら仕度とも精知していつ
 ますくら実にお頼ひごおざりまのトのりたなくお花ハひの
 うちにはい。ち照と誘ひ行ハ務をもせねはるす。芝居と
 一ト幕のぞく夏も出来ねバ大きお胸善用の遠くとも

詮方ゆくそるら行がのり家ハ隣の婿婆えと頼んで
 三とも連く行まーやう。早く早く仕度とあひまのりくごせ
 がみつとてお照ハそりくハ衣袋と着入涙をふく母と
 のりとも菩提所金龍寺にゆいで墓余りや。お花ハ早
 くおく立ちく。道ゆらち。お照ハ草履の鼻緒とあつ切
 けまが。母さん鼻緒が切ますーこよ。草履
 の鼻緒がまきとてく。何てもいまるものゆらね
 へおのり足あや。双でものを見へく草履でも下駄でもた
 うせると直に鼻緒と切が癖とところお雪駄直ぐのり
 ろうとあや。いひひひトのりを見まのり

ひ橋のふもとに雪駄をよりの休まわると下女が見つ
 けく「お娘さんあそこまゝ直しがあつたか」
 「直しどそつどつとどぞは草履の鼻緒とちうの
 とそくおつとトさま取うげあひ目元口りと紅白粉でよそ
 りつた。そのうらうらき度ぞつとするかどる容色に彼の雪
 駄直しのまのうらうらまけつと見て楮も世の中はこ
 んな美しの娘もあるものうと。瞥し見とまぐらひうら
 とおをまがめて此然とあての体にお照のぞつとこつげ
 とち「おやけ人のいりやト母の後へくるにわ三の何の氣
 もつたす」
 「まゝ直しどんまゝ持つておまを待てるか」

のまぐらひの娘も「まゝ直しどんまゝ持つておまを待てるか」
 流の中より道具より「お娘さんお照が鼻緒をまぐらひの
 まぐらひのまのうらうらまけつと見て楮も世の中はこ
 ンな美しの娘もあるものうと。瞥し見とまぐらひうら
 とおをまがめて此然とあての体にお照のぞつとこつげ
 とち「おやけ人のいりやト母の後へくるにわ三の何の氣
 もつたす」
 「まゝ直しどんまゝ持つておまを待てるか」

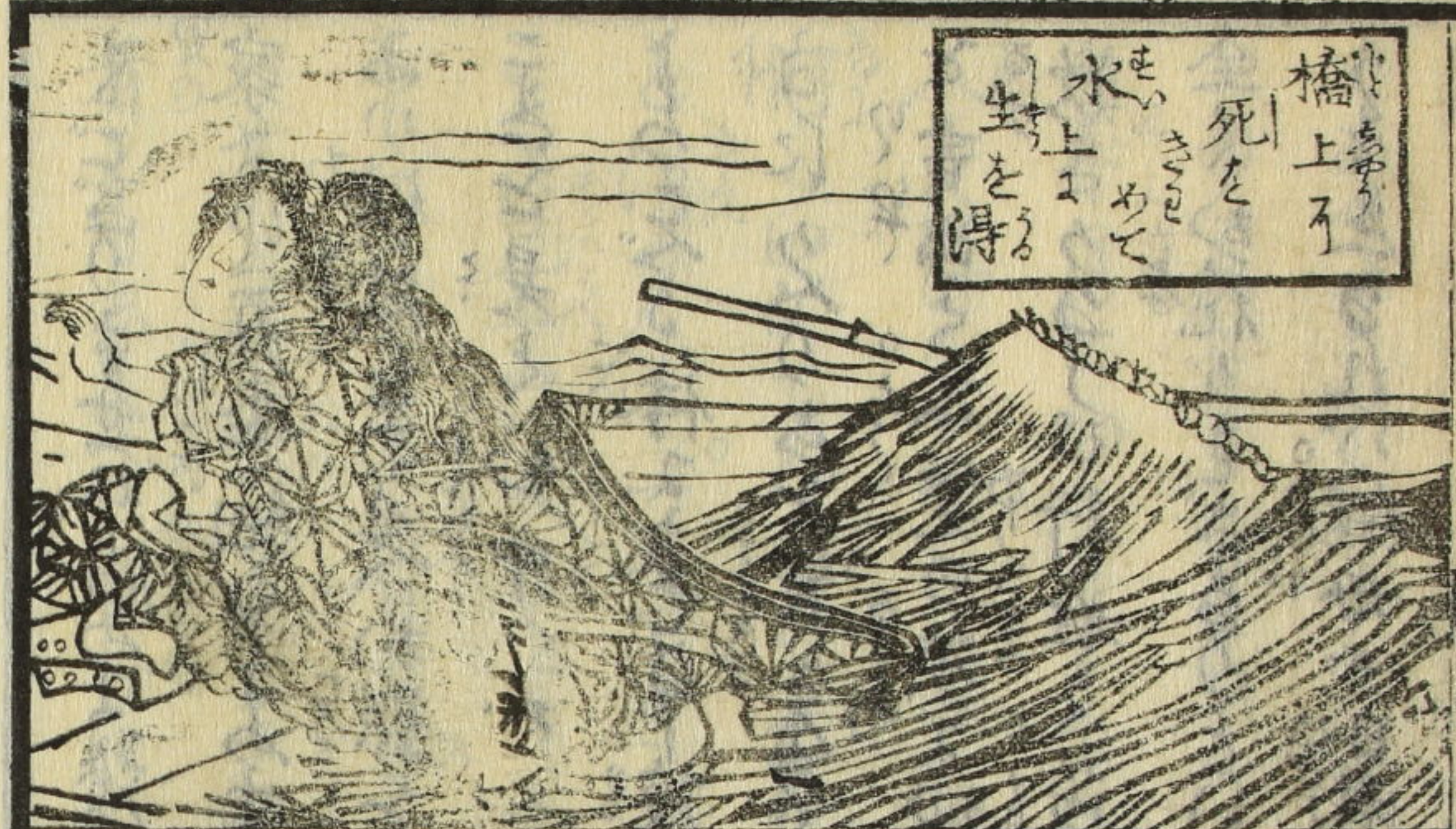
し密に下女をきて其少翁を聞せし斯て其夜人知るべから
たハうれがむふたのいつ何卒お熊と奪ひ去り何方へも連行
ふまよと頼むけるもぞ聖駄車ハ大まお怖ひあまおたのめする
た野の幸ひありきて早速兼知しけまおたの捕彼の非人に
向ひ必すく遠方へ連退せしむとよりく頼む申入金と子
今く帰りけり幸輝おどろく斯る冠母がそむりよハ一点あつ
ず次の夜門辺お涼きいなり一野へ古なるも我れて面を包し曲
者二三入あらはしぬ矢庭おお熊と引ごころ音妻橋の方へま
るに下女が見つけくアコト跡ふお花の故意と因章お
とめたさる行粧ゆく近隣の人とよびあつるお何夏あまとして

んぐは泊物くと引提く篠り末はバお花の空泪とてか
今う娘お照と何者う勾引して自下の方へ走りしといふこと
ハさて人々の台下のうへ走り行くと従来方角も遠ひなる
といひ如法闇夜の夏るまが皆お空しくまをて立ち入りぬ

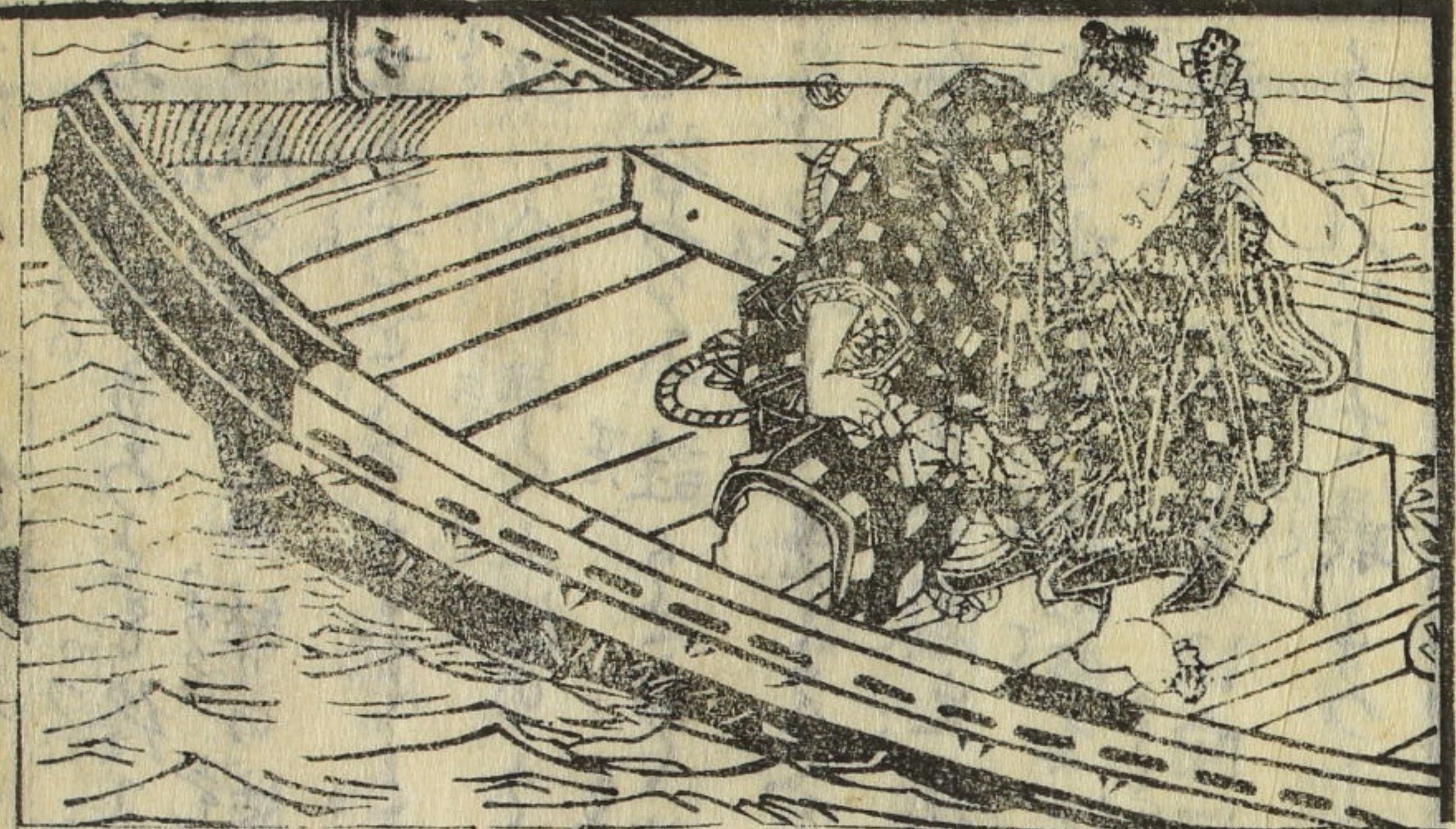
第三回

お照の曲者のこゝに奪ひ去らる吾妻橋の上をうけけり
心中お思ひまうい這者吉をうむひ行ハ定や一掬女を賣
らんとなつてこの身ハ襦袢のうらりり。竟太郎さるとやら
んのい人と言ふのせしむとくハ譬へり行来あまどとりの
とも未あつと生死もあまざるふ君傾城とりの。多人の入る

橋上り 死を 水の上 生を得



まは茂次郎は花を悪むることをあら
ねがふく安堵の思ひをみるぬか
い父が存生のみなり物好しては
る國有のうらちと白銀あて作
る釵と常お秘藏あてさくわ
父アの強動のとなり船のうらちへ落
せしをぬひしうの問はてをらり
ささくふ何やらんまはるるもの
けきねぬりしをぬひすまはる
て伯父のうらちをらりし家に



くりて見まば吾釵あはわさか
ほくは并のくくふくわりけき
おどろきよしくあさむら吾家の
定紋と彫りいらいと茂次郎
に這度とくりけき茂次郎は
の并の雙とみくふて眉をひとめ
茂この并原我家の物なり父
茂大夫さるより傳來の品なり
日外許覚太郎を三社祭へ誘ふ
は并とみくふりてをらりし其後

ありて并ゆるとも終る行旅をさすりしがいつて夕
 の船の中にある并の落こりしやらんまが破船宿へおたて
 其実否をいふと早速船宿へおたてとひいふ彼の船
 頭ハ今朝早く上総のうえをひきまてりうる夏やらあま
 と答ふるふ詮くさく其まき立久りぬ斯く茂次郎ハ故々
 ながら久しくさまるべしあまわねばお花にか照がことを
 今ドくこの聞え兄の敵とささんともかも回国修行ま
 姿とあしお花お花といふををつけて立出ぬ。妾不きと鳥
 越村といふところに向坂甚内といふ者あり原けんりの
 うのれにて最まぐりくその日を送りうねるのりなり注

年不回国遠るして數の年を経くくり來てあまの
 の夏もや金銀を多く貯録人其金を貸して利分とと
 りて活業し一兩刀を横々(武士の浪人のおとく)いてさら
 てあるにけとど金銀多くあるにすくせくあつる人の
 故ひけとど甚内いこととよれたことくひねよるの我意
 とふるまひ邪なる行跡も多りうることの甚内あま色
 好の性なり一がのりうお照がわて中なる姿をんそめ
 ひたるに人とのあまお花がめく人多くの金銀を送り
 一聳みからんあまのどと一ういなりたの甚内が富る
 と聞くと一美あまあまば兼引をいどお照が日頃より

高尾外傳 卷之二

廿四

